様々な困難に直面している人々が自分らしく健康に過ごせることを願い、
感染症病棟を経て国際保健への道を歩み始めた看護師

はぎわら　ゆう
萩原　悠

国際医療協力局
人材開発部・研修課
看護師

★略　歴

2016年3月　福岡大学医学部看護学科卒業
2016年4月　国立国際医療研究センター病院 感染症など一般病棟・結核病棟
2023年4月　国立国際医療研究センター 国際医療協力局入局

★現在の主な担当業務

・台湾長庚科技大学主催「台湾長庚科技大学看護学生研修」
・国立国際医療研究センター主催「国際保健医療協力 看護職実務体験研修」
・JICA課題別研修
「感染予防と管理：COVID-19時代における薬剤耐性と医療関連感染」
・国立看護大学校 国際看護学 非常勤講師
・ラオス人民民主共和国の一般人口における日本脳炎ウイルス・新型コロナウイルスに対する抗体保有率推定のための横断的研究
・医療技術等国際展開推進事業
「ベトナム北部における脳卒中センターのチーム医療体制および地域連携強化事業」

――― 萩原さんが、医療職・国際協力を目指したきっかけを教えて下さい。

幼い頃にマザー・テレサの伝記を読んだことが大きなきっかけでした。貧困などにより厳しい環境で生きる人々の尊厳を守り、寄り添う姿に心打たれ、将来はこのような人になりたいと思うようになりました。当時は漠然としていましたが、中学生の時に祖父が生活習慣病が原因で脳梗塞となり、後遺症が残ったことから、予防の大切さに気づき、保健に興味をもつようになりました。

大学卒業後は大学院への進学も考えましたが、大学の恩師から「一度、治療過程にある患者さんを看てみては」とアドバイスされ、まず病院の現場で経験を積むことにしました。

国際協力に興味を持つようになったのは、幼少期からいろいろな国の方々が自宅にホームスティにいらっしゃったり、私もホームスティに行ったりと、海外の多様な文化や価値観に触れる機会が多かったことが影響しているのかもしれません。

ガーナからホームスティに来た方と（萩原看護師：写真一番左）

海外では楽しい経験の一方で、驚くこともありました。高校2年生の時に留学したアメリカの学校では、内戦から逃れるためや経済的な事情などで、難民や移民として他国から移り住んでいたクラスメイトもいました。リーマンショック後は、仕事や家を失った人々が街にあふれていました。豊かだと思っていた国にも、困難に直面している多くの人々がいる現実を目の当たりにしました。それまでは国際協力・援助を必要としているのは低所得国という「先入観」にとらわれていただけに、現地や現場を訪れる大切さを痛感しました。

――― 国際医療協力局に入職する前はどのようなキャリアを積まれていたんですか。

センター病院に入職後は、感染症等一般病棟・結核病棟へ配属されました。アジアをはじめ、海外からの留学生や滞在者の入院も少なくなく、文化や生活、宗教などの違いを理解し、看護に反映するために試行錯誤の毎日でした。もちろん、日本人であっても様々な事情の方々が入院されていました。国籍や人種などに関係なく、固定概念を持たず、それぞれのニーズにあった看護を提供する必要性を日々感じていました。
2020年に入ってからは、COVID-19のパンデミックに伴う患者の受け入れが始まりました。当初は感染防止のため、家族の面会はできず、会うことができるようになるのは退院後か、亡くなられた場合は火葬後でした。感染予防のためとは言え、最期のお別れもできない家族の皆さんの心中をお察しすると胸が締め付けられる思いでした。それと同時に、自分の無力さを感じていました。病状の進行が速いこともありましたが、重症化してから来院される方の中には、不法滞在や経済的に困窮している方もおり、日本であっても受診に様々な壁があることを実感しました。

病棟で働いていた様子（萩原看護師：写真左）

国際医療協力局に入職するきっかけ、理由はなんだったのですか。

就職活動の際、国際看護が学べる病院を探していたところ、最初に目に留まったのが国際医療協力局でした。病院ではないものの国際協力をしている組織で、国立国際医療センター病院から異動することが可能だったことから、まずはセンター病院で国際看護や国際感染症の看護を学ぼうと思い、入職しました。

センター病院では7年間看護師として勤め、2023年4月、念願だった国際医療協力局へ異動となりました。国際協力を行っている組織は他にもありますが、シニア専門家の指導を受けながら、専門家に求められる5つの能力を高められるという局の方針・体制にも大きな魅力を感じました。

元々、国際保健を目指していましたが、どんなことが国際保健に繋がるのか、どんな準備をしたらよいのか、よくわからずにいました。センター病院では、後輩育成や看護管理の知識やスキルに加えて、上司や先輩らに助言をいただきながら、国際保健にも通ずる多角的な視点で看護について学ばせていただきました。

国際医療協力局では、担当した「台湾長庚科技大学看護学生研修」や「国際保健医療協力　看護職実務体験研修」の構成内容の検討や研修員への理解促進について、病院での経験や学びを大いに活用できました。現在、相手国の研修員が知識や技術を一方的に受け取るだけでなく、主役である相手のイニシアティブをどのように尊重していくかといったアシスト方法を、先輩局員と研修員との関わりから学んでいます。

各国からの訪日研修生と（萩原看護師：写真左）

ラオスの現地スタッフの方々と研修の準備をする様子

今後はどのような展望、夢をお持ちですか。

まだまだ目の前の業務で精一杯ですが、様々な仕事を通して得られる一つひとつの学びを大切にしながら、国際保健の知見を広げ、専門性を高めていきたいと思っています。そしていつかは、開発途上の国々や地域などで暮らす人々たちが、自分らしく健康に幸せに暮らせるようになるための保健・衛生環境の向上に、貢献できるようになることが目標です。

最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

国際保健を目指してきたものの、知れば知るほど、知識面や語学力などハードルがとても高く感じ、くじけそうになることもありました。しかし、思い切って飛び込んでみた結果、忙しい中でも、予想を超える充実した楽しい毎日を送っています。他国のリアルな状況や価値観に接し、これまで思いもしなかったことに気づくことはとても新鮮です。また、一緒に働く方々の考え方の多様性や柔軟性にも日々刺激を受けています。

国際医療協力に関心を持ちながらも、「何か難しそう」と思われている方もいらっしゃるかもしれません。ご自身の興味や好奇心を大切に、ぜひ一歩踏み出してみてください。挑戦の先には、想像以上のやりがいを感じる日々が待っているはずです。

――― ありがとうございました。